（様式1）

令和4年度　学力向上指導改善プラン

弥生小学校長　　朝倉　美穂

学校教育目標	自ら学び　たくましく　心豊かな弥生っ子の育成
推進主体	管理職と主幹教諭・教務主任・研究推進担当・生徒指導担当・新学習システム推進教員を中心に学力向上委員会を設置し、以下の取り組みを実施。

			学力に関する前年度の状況・経年の課題等	学力向上に向けての重点的な目標	4月 成果となる目標（指標となる数値等）	4月 具体的な行動目標（成果目標達成のための具体的な手立て等）	2～3月 年度末評価（今年度の成果と来年度に向けた課題等）	評価
学力の状況	全国学力・学習状況調査結果の状況（国語、算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む）	国語	○「話すこと・聞くこと」領域のうち「話の内容が明確になるように、事実と感想、意見とを区別するなど、話の構成を考えること」や「資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫すること」は全国平均を上回っており、学習の定着がうかがえる。 ●「書くこと」領域の「自分の主張が明確に伝わるように、文章全体の構成や展開を考える」設問は、全国平均を全国平均を下回っており、課題がある。 ●無回答率の高い設問があり、取り組まない（取り組めない）子への手立てが必要である。 ●漢字を書くことについて、更なる習熟の機会が必要である。 ●複数の情報を根拠として自分の考えを述べる活動の習熟が必要である。	○話す・聞く場を設定し、書くことを中心にした思考力や表現力の向上	○学習の成果や成果物（説明文・新聞等）を主体的に交流する機会を増やす。 ○「人の話をよく聞き、自分の伝えたいことを伝える」ことのできる児童の割合増。	①何のために（目的意識）、誰が（相手意識）、条件や場面に合わせる（状況意識）、表現方法（方法意識）、評価意識の観点を児童と共有し、聞く活動とともに書く活動を充実させた交流活動の場を持つ。 ②ICTを含む様々なツールを駆使して、文章の内容の構成の工夫や表現内容の根拠を明確にするなど9つの思考力を向上させる活動を充実させる。	○生活科・総合的な学習の時間を中心とした教科横断的なカリキュラムマネジメントにより、学習の成果や成果物を主体的に交流する機会を計画的に増やすことができた。 ○「人の話をよく聞き、自分の伝えたいことを伝える」ことのできる6年児童の割合昨年比6.7%増。 ①教職員自己評価「よくできた」20%、「できた」80%。全教職員が児童の伝え合う力を育てるために、5つの言語意識を持って日々の授業を実践し、書く活動を充実させることができた。 ②同「よくできた」20%、「できた」80%。ICTなどのツールを駆使して、個人やグループで文書の構成を工夫したり、資料や写真など視覚的な効果を活かしたりしながら説明や発表を行う活動を充実させることができた。	A
		算数数学	○「図形」領域のうち、直角三角形の面積を求める問題の正答率が全国平均を上回っており、図形の関係を理解していると言える。 ○データの活用領域では、棒グラフから分かることを選ぶ問題の正答率が高く、項目間の関係を読み取る力がついていると言える。 ●「変化と関係」領域のうち、二つの速さを求める式の意味について正しいものを選ぶ問題の正答率が全国平均を下回っており、速さを求める除法の式と商の意味を理解していないと考えられる。 ●「数と計算」領域のうち、商が1より小さくなる等分除の場面で数量の関係をとらえて除法の式に表し計算する問題の正答率が全国平均を下回っており、数量の関係を捉える力に課題がある。	○計算力や筋道立てて説明する力を中心とした、算数科の授業改善	○文章題の内容を理解して必要な数量を選び、正確に立式できる児童の割合増。 ○問題解決のために、必要な条件を入れて具体的に説明できる児童の割合増。	③学習タイムにドリルパークを活用し、個別最適化された知識や技能の向上を図る。 ④立式の際には、式の意味を考え、ノートにまとめていくなど、自分の考えを見える化していく。 ⑤何を問われているのか、どの数量が必要なのかを考えるために、問題文の重要な部分に線を引くなど、条件を整理する活動を取り入れる。	○文章題の内容を理解して必要な数量を選び、正確に立式できる6年児童の割合昨年比24.2%増。 ○問題解決のために、必要な条件を入れて具体的に説明できる6年児童の割合昨年比9%増。 ③同「よくできた」50%、「できた」50%。全学年でドリルパークの活用はできているが、学力向上との関連について、今後検証が必要。 ④同「よくできた」11%、「できた」89%。指導と評価の一体化を意識した日々の授業は定着しつつあるが、ノート指導については、個に応じた指導の充実を一層図っていく。 ⑤同「よくできた」10%、「できた」90%。条件を整理することを意識した学習活動を取り入れている。	A
	定期テスト、単元テストなどによる状況（各教科）		○単元ごとにテストを実施し、未定着の児童には同じ問題や似た問題に取り組ませる等して定着するまで個別指導を行っている。（経年）	○「何ができるようになるか」を明確化した、主体的・対話的で深い学びのある授業実践	○知識の理解の質を高め各教科の資質・能力を育む。	⑥「めあて」「振り返り」の定着、「ペアトーク」「グループトーク」による問題解決等の授業に取り組む。 ⑦各教科の学習において、主体的に学びに向かう力や問題解決能力を育成する。	⑥同「よくできた」30%、「できた」70%。各教科の特性を理解し、つけたい力を明確にした1時間ごとの授業を充実させようと教材研究に励んでいる。 ⑦同「よくできた」10%、「できた」90%。児童が主体となる学習形態や単元の工夫をしているところである。	B
	授業等からうかがえる状況（各教科）		○「話し方」「聞き方」の学校のスタンダードを作成して教室前面に掲示し、どの児童にも身につくよう指導している。（経年）	○読書活動の充実	○「本をよく読む」と答える児童の割合を昨年度以上にする。	⑧調べ学習や朝の読書タイムを活用し、学校司書との連携による読書活動の推進を図る。 ⑨毎月23日を「弥生読書の日」とし、家庭への啓発とともに、家族読書の日としての定着を目指す。 ⑩「読書通帳」を積極的に活用する。	○「本をよく読む」と答える児童の割合昨年比5%減。 ⑧同「よくできた」100%。学校司書と連携し、書籍を揃え、学年の学習に関連した図書を紹介する等、昨年度以上に推進できた。 ⑨同「よくできた」90%、「できた」10%。全教職員で継続指導しているが、図書室の本貸し出し冊数増加につながっていない。 ⑩同「よくできた」80%、「できた」20%。高学年になるにつれて「読書通帳」の活用が停滞している。	B
学力向上に係る生活習慣等の学習状況・習慣	全国学力・学習状況調査の質問紙の状況		○朝食をとる、早寝早起きをしている児童が多いことから、概ね落ち着いた家庭生活を送れていると言える。 ●平日1日当たりのゲーム時間が2時間以上、学習時間が30分未満の児童が全国平均を大きく上回っており、ゲーム時間の長さが学習時間に影響を及ぼしていることがうかがえる。情報機器の使い方については、家族との約束を守っている児童が多いが、時間も含めたルールづくりについて、家庭と共に考えていく。 ●計画を立てて学習している児童が全国平均を下回っており、家庭学習習慣の定着に課題がある。宿題だけではなく、自分で計画を立てて予習や復習をする家庭学習が習慣化できるように自主学習の宿題を意図的に出す。	○「早寝早起き」「朝食」等の健康的な生活習慣の定着 ○家庭での仕事や手伝いの継続による生活的自立や自己肯定感の育成 ○主体的な学習習慣の定着	○「早寝早起きができている」「朝食をとっている」と答える児童の割合増。 ○「家の仕事や手伝いをする」と答える児童の割合増。 ○「進んで宿題や調べ学習をしている」と答える児童の割合増。	⑪学級活動、保健、長期休業中の宿題等で、早寝早起きや朝食をとる習慣づくりにつながる取り組みを実施する。 ⑫生活科、学級活動、長期休業中の宿題等を通して、生活をより良くしようとする実践力を養う。 ⑬復習や調べ学習等、宿題内容を工夫する。	○「早寝早起きができている」児童の割合昨年比14%減。「朝食をとっている」児童の割合昨年比2%増。 ○「家の仕事や手伝いをする」児童の割合昨年比9%減。 ○「進んで宿題や調べ学習をしている」児童の割合昨年比9%減。 ⑪同「よくできた」10%、「できた」90%。より豊かな家庭生活に向け、引き続き継続した呼びかけを行う。 ⑫同「よくできた」40%、「できた」60%。毎日して当たり前ではなく、児童がしたことに対して「ありがとう」を伝えることを推進する。 ⑬同「よくできた」20%、「できた」80%。今後も与えられた課題に対して自分から進んで取り組む学習習慣を身に付けさせたい。	B
	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況		○地域行事に積極的に参加する児童もいる。 ●家庭での仕事の習慣、主体的な学習習慣については課題がある。（経年）					
校内研究・研修の状況	校内研究の状況		○思考ツールを他教科でも活用し、児童の思考力向上や意見交流で成果が見られた。 ○朝学習にミライシードを活用し、学年を越えて意見交流できる機会を設定できた。	○校内研究において、『地域や仲間と関わり合い、主体的に取り組む子ども～場面に応じた効果的な思考ツールを活用しながら～』のテーマに沿った研究の推進	○地域の「人・もの・こと」とつながる活動を仕組んで実践する。 ○専科や養護教諭などの実践も校内授業研究に取り込む。	⑭人と自然の博物館研究員との連携授業、校内研究に継続指導・助言いただいている講師招聘により、協働的・探究的な学習の研究を推進する。 ⑮思考ツールや新聞を活用した朝学習《おはようチャレンジタイム》を実施する。 ⑯一人一回以上の研究授業や見合い授業で授業力の向上を図るとともに、ユニバーサルな視点を取り入れて「弥生っ子スタンダード」授業の構築を目指す。	⑭同「よくできた」100%。昨年度より積極的に地域の方や学生とつながりながら、児童が主体的に取り組む学習単元が組めた。 ⑮同「よくできた」40%、「できた」60%。思考ツール活用シート見本が完成した。更なる主体的な活用が期待できる。 ⑯同「よくできた」10%、「できた」90%。専科や養護教諭等の実践については引き続き教職員一丸となった研究をめざす。小規模校の強みを生かし、学校全体を見渡した指導力向上に努める。	B
	校内研修の状況		○主体的で対話的、深い学びのある授業づくりやカリキュラムマネジメントについて研修する。					
家庭・地域等の状況	家庭・地域等の状況		○地域（弥生が丘自治会）と連携し、ふるさと弥生を愛する心の醸成につなげる。（経年） ○学校支援ボランティアの活動が定着しており、学習や行事に関わっていただいている。 ○『放課後子ども教室』の実施は、地域に子どもの居場所が位置付けられることにつながっている。	○ふるさと弥生を愛し、たくましく生きる子どもの育成	○学校・家庭・地域の連携強化を図る活動への参加を推奨。	⑰「安全・安心」「ふるさと弥生」をキーワードに学校・保護者・地域の役割分担と連携を明確にし、それらの実践と検証を行う。	⑰同「よくできた」20%、「できた」80%。地域と連携した活動を学校からも提案することができた。子どもたちに「地域の一員」としての自覚が芽生え、ふるさと弥生を愛する心の醸成につながっている。	A
小・中における教科連携等の状況			○各学期に1回の富士中校区4校校長会、幼小中特連絡協議会を実施。（経年）	○目指す児童像を共有した学校園所連携の推進	○児童生徒交流部会を年2回開催し、幼小中特連絡交流会を年3回実施する。	⑱児童生徒間交流部会では、あいさつ運動、クリーン作戦等を推進する。 ⑲幼小中特連絡交流会では、研修会、研究授業、幼小連携・小中連携等の企画実践を推進する。	⑱同「よくできた」10%、「できた」90%。対面で交流部会を年2回実施できた。校内での展開にもう一工夫したい。 ⑲同「よくできた」10%、「できた」80%、「あまり」10%。対面で交流会を年3回実施できた。今後、小中一貫教育に向けての取り組みを具体的に進める。	B